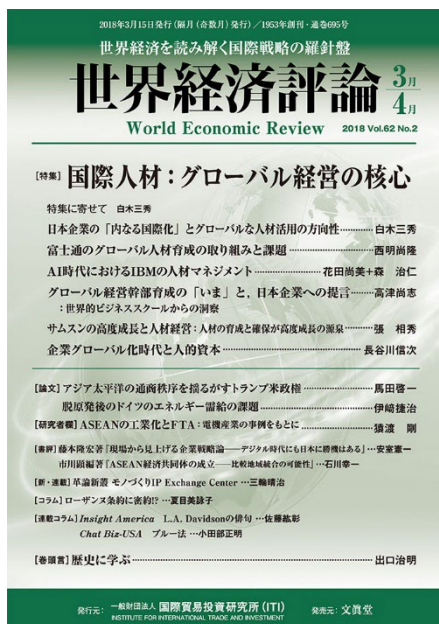


本論文は

# 世界経済評論 2018年3/4月号

(2018年3月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

## 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF



定期購読  
期間中

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

デジタル版バックナンバー読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。  
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp  
雑誌のオンライン書店

## L.A. Davidson の俳句

佐藤 紘彰

昨秋、ローラ・タナ (Laura Tanna) という方から丁寧な手紙があった。「母 (L.A. Davidson) の句集を出したので1冊送りたい。母は10年前90歳の時に亡くなったが、今年は生年100年、母が残した600句から50句を選んで本にまとめた。両親を再び結びつけるため、挿絵には父カービー (Kirby) が残した一万点のスライドから何点か選んで添えた」という。

「再び結びつける」というのは、両親が古希を超えて離婚したことを指す。

## 「ホームステッド法」

L.A. デイヴィッドソンさんは、ほくが1979年から1981年まで3年間アメリカ俳句協会の会長をつとめた時に初年と3年目に秘書をつとめた人で、それから6年後拙著『英語俳句 ある詩形の広がり』(サイマル出版会)の「英語俳句の実作と鑑賞」の章に選んだ9名の俳句作家の一人として登場してもらった人でもある。名は、公式には頭文字のL.A.だけ使ったが、綴れば Laura Agnes (ローラ・アグネス)。日常の会話や手紙ではアグネスを用いた。ここではそれをを使う。

送ってきた句集“My Favorite Fifty Haiku”(『私の好きな五十句』)には、娘のローラさんが序文に代えて「一詩人の人生」として母のことを簡潔に記している。

アグネスさんは、モンタナ東部のロイに、ホームステッド法 (Homestead Act) の同州最後の利用者を両親として1917年に生まれた。ホームステッド法は、1862年、つまり南北戦争が始まってまもない年、リンカーン大統領の下に成立した法律である。単に白人で市民であれば、農場を作り5年間に農地を改善するという誓約だけで希望者に各人64ヘクタール(約20万坪)を無料で与えた。西部開拓が目的だった。ロイは、グーグル

で見ると、茫漠たる平原にあり、今でも unincorporated すなわち地方自治体としての体制をとっていない。

この広大な農場を、アグネスさんの両親は、1929年に始まった大恐慌と1930年代に中西部を襲った干ばつによる大砂塵 (Dust Bowl) で失った。それでもアグネスさんは奨学金を得てミネソタ大学に進み、ジャーナリズムを専攻。その時インタビューした人たちの中にはクラーク・ゲブルやキャロル・ロンバードもいたが、残念なことにその記事は失ってしまったという。

卒業すると、アグネスさんは政府での職を求めて自分の書いた記事を携えてワシントンに行った。FDRが大恐慌対策ニューディールの一環として公共事業促進局を設け、音楽家、文筆家、俳優、写真家、ダンサーなどを雇って地方に送る事業を実施していたからだ。ところが、面談で「支持政党は？」と尋ねられて、「共和党です」と答えると、面接者の顔がちまち曇り、結局雇われなかった。それは共和党がFDRの政策に真っ向から反対していたためだが、アグネスさんが投票した唯一の共和党員は、それから10年余後の1950年代のアイゼンハワー大統領だけだったそうだ。

## 熱烈な恋の相手

アグネスさんはFDR政権にはねられたとはいえ、1941年には熱烈な恋をしていた印刷業者 Ralph Kirby Davidson と結婚、二人は ‘The Reporter and Farmer’ (「記者と農夫」) という新聞を出した。この若い時の経験のためであろう、ほくがある時「ルビ」を説明しようとしたら、それなら知っています、活字のポイントでしよう指摘してくれた。それに対して、ほくはルビというのは振り仮名に与えた洒落た名前だろうと考えていたのだ。

1943年最初の娘キャレンが生まれた。ご夫君はまもなく招集されて太平洋戦線に送られ、そこから無事に戻って来ると、アグネスさんの励ましもありモンタナ大学に進んで、そこで二番目の娘ローラが生まれた。ご夫君は優秀で、モンタナ州初のローズ奨学金取得者になってオックスフォード大学に留学した。帰るとジョンズ・ホプキンズ大学に進み、1954年には博士号を得た。

博士号といえば、最初の娘キャレンも二番目の娘ローラと同じく博士号を取得、二人の娘が博士号を得たことはアグネスさんには大いなる誇りとなった、とローラさんはいう。

1962年、ご夫君はウガンダの大学の客員教授になった。これはロックフェラー財団の仕事で、援助を必要とするアフリカの大学の調査だったため、アグネス一家はアフリカ大陸を縦横に旅行した。帰ると財団はマンハッタンでの重要職を提供、一家はグリーンニッチ・ヴィレッジに住むことになった。そこでアグネスさんは俳句愛好者 Elizabeth Searle Lamb と知り合い俳句を知った。二人は1968年アメリカ俳句協会の創立会員になった。

### 星の彼方

俳句は細かい注意力を必要とする。これが新聞記者だった母にぴったりだった、と娘のローラさんは書く。以下、アグネスさんの句を選ぶ。

winter morning

without leaf or flower

the shape of the tree

冬の朝葉も花もなき木の形

resident lizard

in the middle of the night

chorkles for an hour

真夜中に同居の家守半刻鳴き

after the flutter

of the small bird ascending

the long slide

ハタハタと小鳥昇って長滑り

on shore alone

as the ebbing tide

takes the moon with it

浜一人引き潮月をとってゆく

at the island cafe

voices sink to a murmur

the sun goes down

島のカフェ声々落ちて陽の沈む

a bonsai

bent to the shape

of a non-existent wind

盆栽や不在の風の形に曲げ

now he has gone

how silently the snow falls

this first day alone

人去って雪降る静か最初の日

it is growing dark

no one has come to the door,

and still the dog barks

暮れゆきて誰来ぬドアに犬が吠え

beyond

stars beyond

star

星々の彼方の星の彼方かな

さとう・ひろあき 日本詩歌英訳、文筆家